

教員採用試験

2023

教職教養

テキスト

TEXT

教育原理



# コントロールタワー

| 講義回   | 学習内容      |                     | テキスト   |   |       | トレーニング   |
|-------|-----------|---------------------|--------|---|-------|----------|
|       | テーマ       | 内容                  | 章      | 節 | 対応ページ | 対応問題     |
| 第 1 回 | 教育論       | 教育の意義               | 第 1 章  | 1 | P.1   | 問題 1～9   |
|       |           | 教授・学習理論             |        | 2 | P.4   |          |
|       |           | 学習指導の形態と方法          |        | 3 | P.14  |          |
| 第 2 回 | 教育課程論     | 教育課程の概念             | 第 2 章  | 1 | P.20  | 問題 10～17 |
|       |           | 教育課程の類型と変遷          |        | 2 | P.23  |          |
|       |           | 教育課程の編成と特例          |        | 3 | P.26  |          |
| 第 3 回 | 学習指導要領    | 学習指導要領の変遷           | 第 3 章  | 1 | P.40  | 問題 18～27 |
|       |           | 学習指導要領の特質           |        | 2 | P.49  |          |
|       |           | 学習指導要領「総則」の概要       |        | 3 | P.54  |          |
| 第 4 回 | 道徳教育      | 道徳性と道徳教育            | 第 4 章  | 1 | P.75  | 問題 28～36 |
|       |           | 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育 |        | 2 | P.77  |          |
|       |           | 道徳科の目標・内容           |        | 3 | P.81  |          |
| 第 5 回 | 特別活動      | 特別活動の目標・領域          | 第 5 章  | 1 | P.96  | 問題 37～42 |
|       |           | 領域ごとの目標と内容等         |        | 2 | P.99  |          |
|       | 総合的な学習の時間 | 創設の経緯・目標            | 第 6 章  | 1 | P.112 | 問題 43～47 |
|       |           | 各学校において定める目標・内容等    |        | 2 | P.115 |          |
| 第 6 回 | 生徒指導      | 生徒指導の意義と課題          | 第 7 章  | 1 | P.122 | 問題 48～57 |
|       |           | 生徒指導の方法             |        | 2 | P.127 |          |
|       |           | 問題行動の現状と対応          |        | 3 | P.131 |          |
|       |           | 問題行動を起こす児童生徒に対する指導  |        | 4 | P.139 |          |
| 第 7 回 | 特別支援教育    | 特別支援教育の意義・目的・歴史     | 第 8 章  | 1 | P.152 | 問題 58～68 |
|       |           | 障害の程度、教育機関等         |        | 2 | P.160 |          |
|       |           | 特別支援学校の教育課程の編成等     |        | 3 | P.165 |          |
|       |           | 障害の定義と指導法           |        | 4 | P.175 |          |
| 第 8 回 | 人権教育      | 同和問題と同和教育           | 第 9 章  | 1 | P.186 | 問題 69～76 |
|       |           | 同和問題・人権問題の歴史        |        | 2 | P.189 |          |
|       |           | 同和問題・人権問題に関する法令等    |        | 3 | P.193 |          |
|       | キャリア教育    | キャリア教育              | 第 10 章 | 1 | P.207 | 問題 77～81 |
|       | 情報教育      | 情報教育                | 第 11 章 | 1 | P.215 | 問題 82～88 |
|       | 社会教育・生涯学習 | 社会教育                | 第 12 章 | 1 | P.226 | 問題 89～91 |
|       |           | 生涯学習                |        | 2 | P.230 |          |

## 本書の特長と使い方

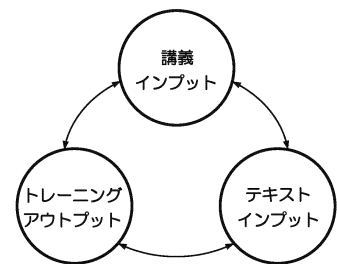
本書は教員採用試験合格のための専用テキストであり、次のような方針で作成されている。

### 1. 本書の構成

このテキストは、本書一冊で初めて学習する人でも、無理なく合格に必要な知識を身に付けられるよう、本試験における重要論点をわかりやすくまとめている。また講義とトレーニング（問題集）に沿った構成となっており、関連する事柄はコントロールタワーで確認できる。

### 2. 本書の使用法

講義はコントロールタワーの進度に従い、このテキストに沿って進行する。講義では全体像の把握と重要論点を理解するための解説に重点が置かれるので、必要に応じてテキストの細かな情報にも目を通してほしい。また、学習した内容が本試験でどのように問われているのかを、トレーニング（問題集）の該当問題を解いて必ず確認すること。



### 3. 本書の表記

#### (1) 「重要キーワード 暗記&checkシート」について

章の最後には、重要ワードのチェックリストを収載している。暗記ペンなどを使用して復習し、記憶の定着がされているか、定期的にチェックしよう。

#### (2) 「学習指導要領」について

本書中の「学習指導要領」は、特に記載がある場合を除いて、2017（平成29）年、2018（平成30）年公示版学習指導要領のことを示す。

# 教育論

## 第1節 教育の意義

### 1. 教育の意義

#### (1) 教育とは何か

「教」…「上の施すところを下の効ところなり」

大人が子どもに模範となるものを伝達すること。

「育」…「子を養って善をなさしむ」

子どもを正しい方向に導き、誤った方向に進みそうな子どもがいれば、教え諭して正しい方向に導いて徳を实践させる。

(『説文解字』より)

原義としての教育は、模範の伝達であり、一般的に良、善、美、優、秀とされるものについて、子ども達に教えていくということになる。

#### (2) 教育の必要性

ルソー※1は1762年、『エミール』の第1編冒頭部で次のように記している。

|        |                                                                                                                                                    |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 『エミール』 | 私たちは弱い者として生まれる。だから私たちには力が必要だ。私たちは何ももたずに生まれる。だから私たちには助けが必要だ。私たちは分別をもたずに生まれる。だから私たちには判断力が必要である。生まれたときに私たちがもっていなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によって与えられる。 |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

ルソーは、「大人になって必要なものはすべて教育によって与えられる」として、教育の必要性・重要性を主張した。

※1



(Jean-Jacques Rousseau・1712～1778)  
フランスの哲学者

ルソーの後に誕生したカント※2は、動物には生まれながらにして生きるために必要な本能が与えられているが、人間の誕生時、理性は「未開の状態」であるため、理性を理性として開花させるための教育が必要であるとして、ルソーと同様、教育の必要性・重要性を説いている。

|                 |                                                          |
|-----------------|----------------------------------------------------------|
| 『教育学（講義）』<br>※3 | 「人間は教育されなければならない唯一の被造物である」<br>「人間は教育によってはじめて人間となることができる」 |
|-----------------|----------------------------------------------------------|

### (3) 野生児

#### ① アヴェロンの野生児

アヴェロンの野生児は、フランスのアヴェロン地区コーヌの森で1797年頃に発見され、1800年に保護された推定11～12歳の少年のことで、後にヴィクトールと名づけられた。

ヴィクトールは容姿、形態こそ人間そのものではあったものの、言語の使用は不可能で、人間的な感情も示すことができず、医師のイタル※4により5つの教育目標に基づいた訓練が施された。

触覚・味覚・嗅覚の感覚機能の回復、思考の交換などの面では多少の進歩がみられ、簡単な文章を理解したり書いたりできるようにはなったものの、言語を獲得したといえるレベルには達せず、また知的能力の発達もあまりみられなかったため、イタルの訓練は失敗に終わった。

#### ② アマラとカマラ

アマラとカマラ※5は、1920年インドの西ベンガル州ミドナプール近郊の森で浮浪児のような姿で発見された、およそ1歳半と8歳の2人の少女(年少の子がアマラ、年長の子がカマラ)のことであり、孤児院を営んでいたジョセフ・シング牧師とその夫人に保護された。

食べ物を手を使わずに直接口で食べたり、手を使って歩いたり、遠吠えしたりと、オオカミに類似した行動や生活様式が見られたので、シングは彼女達がオオカミに育てられたと主張した。

シング達の心血を注いだ養育によって、カマラは30個程度の単語を覚えるなど少しずつ言語を習得したが、完全な人間性を獲得することはできず、アマラは保護から1年足らずに腎臓炎で、カマラは1929年に尿毒症で死亡した※6。

※2



(Immanuel Kant・1724～1804)  
ドイツ観念論哲学の祖とされ、啓蒙思想家でもあった。

※3  
1803年

※4  
(Jean Itard・1774～1838)

※5  
(Amala & Kamala)

※6  
近年では、アマラとカマラがオオカミに育てられたという説はシング牧師の創作であったことが明らかとなっており、彼女たちは野生児ではなく自閉症もしくは精神障害のために親から遺棄された孤児だったと考えられている。

#### (4) 意図的教育と無意図的教育

**意図的教育**とは、学校教育のように児童・生徒に対して意図的・計画的な働きかけを行う教育のことを指す。

**無意図的教育**とは、気候・風土等の自然環境や社会的環境のように、意図しないままにそれらが人間の変容に関わってくことを指す。教師の意図しない行動様式や言葉遣いを身に付けるなど、学校現場でも行われており、これらを潜在的カリキュラム（隠れたカリキュラム）という。

#### (5) 訓育と教授・陶冶と学習の転移

##### ① 訓育と教授

**訓育**とは、教材などは必要とせず〈教師—子ども達〉という関係による教育作用のことをいい、教科外教育や徳育などがあたる※7。

**教授**とは、教材を媒介として成立する教育作用のことをいい、教科教育・知育などがあたる。

実際の教育活動では訓育と教授を明確に分離して捉えることは難しく、徳育と知育とが密接に関係合っている。

##### ② 陶冶と学習の転移

**陶冶**とは個人の生まれ持った性質や能力を育成させることであり、実質陶冶と形式陶冶に分けて考えることができる。

**実質陶冶**とは、学習する教材の内容そのものが、学習者に直接的な効果をもたらすことをいう。

《例》外国語を勉強する際の語彙や文法、発音の習得

**形式陶冶**とは、学習内容の習得よりも、生活の中での思考力や態度に影響を与えることをいう。

《例》異文化に興味を持ち、日本語・日本文化への理解を更に深める

なお、一度習得した知識や技能は、それに近接する他の知識や技能の習得に効率的に作用する。これを**学習の転移**という。

※7

教師が訓話などを通じて子ども達に道徳的な教育を行う際など

## 第2節 教授・学習理論

### 1. 教授・学習理論の歴史

#### (1) コメニウス以前

教授学はソクラテス※1の「問答法」※2に始まるといわれる。

「問答法」とは、相手に対して質問と回答とを重ねることによって、相手の理性や考えを引き出し、無知を自覚させていくことである。

中世ヨーロッパでは、教会学校と呼ばれる教会に附設する学校がつけられた。その中で初等教育を担ったのが唱歌学校で、読み、書き、計算、唱歌、祈祷など、暗記を中心とした教育が行われた。

また中等教育機関に相当したのが修道院学校であり、キリスト教僧侶の修養所としての役割を担ったが、僧侶志望者だけではなく一般児童も学んでいた※3。

#### (2) コメニウスの直観教授法

コメニウス※4は1657年、『大教授学』において、金持ちのためのものだった当時の学校についての批判を行い、学校制度・学級・カリキュラム・教科書など、教育上の基本的課題のすべてについて全面的な改革を提案した。

またコメニウスは、感覚の伴わないものは理解できないとする「直観教授法」を提唱し、従来の注入主義的な教授法を批判した。この理論はペスタロッチやヘルバルトをはじめとして、後世に大きな影響を与えることとなる。

こうした理論に基づいて、1658年、コメニウスは世界で最初の子どものための絵入り教科書『世界図会（絵）』を著した。この著書は子どもが知識を習得しようとする時、言葉のみではなく、視覚という感覚に訴えて習得することが効果的であるという思想に基づいている。

#### (3) ルソーの消極教育

ルソー※5の著書としては『エミール』※6が最も重要である。

|        |                                                  |
|--------|--------------------------------------------------|
| 『エミール』 | 「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる」 |
|--------|--------------------------------------------------|

※1

（Sokrates・B.C. 469～B.C. 399）

※2

「産婆術」ともいう。

※3

読み、書き、計算、ラテン語といった初等の教育に加え、自由七科（三学〈修辞学、文法、弁証法〉と四科〈算術、天文学、音楽、幾何学〉）を教授していた。

※4



（Johann Amos

Comenius・1592～1670）

現在のチェコ共和国の東部生まれの教育思想家であり、近代教授学の祖と呼ばれる。

※5

（Jean-Jacques

Rousseau・1712～1778）

スイスのジュネーブ生まれ

※6

1762年。

全5編で構成されており、第1編はエミールの幼児期、第2編、第3編は少年期、第4編は青年期（ルソーはこの時期を「第二の誕生」と呼んでいる）、第5編は結婚までとなっている。



|        |                                                                                              |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 『エミール』 | 「自然は子どもが大人になる前に子どもであることを望んでいる。この順序をひっくりかえそうとすると、成熟もしていない、味わいもない、そしてすぐに腐ってしまう速成の果実を結ばせることになる」 |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------|

大人側からの強制的な教え込みを否定し、子どもの個性に合わせて発達を援助し、子どもを子どもとして自然のあるがままに成熟させることの重要性を説いた（消極教育）。そのため、『エミール』は「**子どもの発見の書**」とも呼ばれている。

子どもを子どもとして成熟させるために、発達段階とそれに基づく教育課題を設定して、幼児期では感覚訓練、少年期では知育、青年期では徳育が、それぞれにふさわしい課題であるとした。

また教育の方法として、「人間による教育」※7と「事物による教育」※8を「自然による教育」※9に合致させる教育を唱え、これを「合自然の原理」とした。

#### (4) ペスタロッチの教育論

ペスタロッチ※10はフランス啓蒙主義、特にルソーの影響を受けて法律家となることを考えたが、農業改革家として生きる決意をする。しかしチューリヒ郊外に農場を開いたものの失敗し、この間貧しい農民の子どもたちを相手に労働と教育とを一体とする活動（貧民学校）を営んだが、これも挫折した。

やがて彼の関心は教育に向けられ、1780年、『**隠者の夕暮**』を著した。

|         |                                                    |
|---------|----------------------------------------------------|
| 『隠者の夕暮』 | 「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間、その本質からみた人間、一体彼は何であるか」 |
|---------|----------------------------------------------------|

ペスタロッチは人間平等の精神に基づいて、初めて民衆の子どもを教育の対象として位置付けた。

また、「家庭の幸福は、最もよき、もつとも著しい自然の関係である」として、家庭教育の重要性を主張した。

続いて執筆した『**リーンハルトとゲルトルート**』※11では、民衆の経済的自立のための教育の必要性を主張し、その後『**シュタンツ便り**』※12、『**メトーデ**』※13、1801年には『**ゲルトルートはいかにその子らを教えるか**』※14と教育技術に関する著作を残していく。

※7  
本来の意味の教育

※8  
事物との接触による経験的学習

※9  
身体諸器官の発達

※10



（Pestalozzi・1746～1827）スイスのチューリヒ生まれ

※11  
1781～87年。『隠者の夕暮』で示した考え方を小説の形式で展開したもの。

※12  
1799年。シュタンツの孤児たちとの経験を友人への手紙の形で書いた。

※13  
1800年。直観主義に基づいた教育方法論

※14  
ゲルトルート児童教育法

『ゲルトルートはいかにその子らを教えるか』において、子どもの教育の目的を、精神的（頭）、道徳的（心）、身体的（手）に調和のとれた発達の援助とした。これは、Head・Heart・Handの調和的発達の重視という観点から、**3H'sの思想**と呼ばれている。

またペスタロッチは労働による人格陶冶を唱え、労働による経済的自立と、それによる余裕からの道徳的人間への成長を説いた。

そうした労働を通じて感覚器官を磨き、知識を言葉によって教えるのではなく、感覚器官を通じて教えていくという**直観教授**の方法を提唱した。

#### (5) ヘルバルトの四段階教授法

ルソーとペスタロッチによって形づくられていった教育思想を、自立したひとつの学問レベルにまで体系化したのがドイツの**ヘルバルト**※15である。

彼は教育の究極の目的を「品性の陶冶」、つまり強固な道徳的性格の形成にあるとし、その方法を「教授」「訓練」「管理」の3つの概念に区分した。

そこから1806年、『一般教育学』において以下のように述べ、教授の進め方として**四段階教授法**を提唱した。

|         |                                                 |
|---------|-------------------------------------------------|
| 『一般教育学』 | 「教授のない教育などというものの存在を認めないし、また逆に、教育しないいかなる教授も認めない」 |
|---------|-------------------------------------------------|

#### 【四段階教授法】

|          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| 1 明示（明瞭） | 対象を限定することによって、意識の混乱が生じないようにすること |
| 2 連合     | 明瞭にした対象とすでに習得している知識を結合すること      |
| 3 系統     | 連合で経た知識を体系化すること                 |
| 4 方法     | これらの段階を経た知識を、ほかの事柄に応用すること       |

この考え方は弟子の**ツィラー**※16や**ライン**※17に受け継がれ、ラインの**五段階教授法**（予備—提示—比較—総括—応用）として発展した。

※15



(Johann Friedrich Herbart • 1776～1841)

※16

(Tuiskon Ziller • 1817～1882)

※17

(Wilhelm Rein • 1847～1929)

## 【教授段階の比較】

|       |      |      |      |      |      |
|-------|------|------|------|------|------|
| ヘルバルト | -    | 1 明示 | 2 連合 | 3 系統 | 4 方法 |
| ツィラー  | 1 分析 | 2 統合 | 3 連合 | 4 系統 | 5 方法 |
| ライン   | 1 予備 | 2 提示 | 3 比較 | 4 総括 | 5 応用 |

## (6) フレーベル※18の幼児教育

現在、庭園・花壇のある幼稚園などで、遊戯・お絵かきなどを中心とした幼児教育が行われるようになったのは**フレーベル**の主張による。

フレーベルは1826年、『**人間の教育**』を刊行し、**万有内在神論**の立場から、すべての子どもは神性を宿し、これを啓発することが教育の目的であると主張した。

彼は植物園での植物管理が、植物の本性に従い、水や肥料を施し、日照や温度を適度にし、必要に応じて枝打ちなどをするように、教育者も子どもの本質に対して受動的・追隨的に対応して、その自由で創造的な自己活動を見守り、保護、助成しなければならないと主張し、そうした教育を行う場を**Kindergarten**（子ども達の庭＝**幼稚園**）※19と呼んだ。

幼稚園における教育は、遊びや作業を中心にすべきであるとして、遊具を考案し、花壇や菜園、果樹園からなる庭を必ず設置すべきであるとした。

そして、フレーベルのもう一つの功績は「**恩物**」と呼ばれる遊具を考案したことである。「恩物」とは、神からの賜物という意味で、幼稚園における遊具として活用された。

## (7) ナトルプの社会的教育論

**ナトルプ**※20は1899年、『**社会的教育学**』を著し、その中で人間は人間社会に生まれて、人間的な社会生活を通じて初めて「真の人間」となることができる」と主張した。

|          |                        |
|----------|------------------------|
| 『社会的教育学』 | 「人間は、人間社会において初めて人間となる」 |
|----------|------------------------|

教育の根本を知性の陶冶だけではなく、意思の陶冶であるとし、従来の教育学は個人に対する教育であって、社会のことを考えたものではないと批判した。

また科学、道徳、芸術の調和的発展を教育の基本として、教育を社会の側面から捉えようとする社会的教育学を創始した。

※18



(Friedrich Wilhelm August Fröbel • 1782 ~ 1852)  
ドイツのテューリンゲン州生まれ

※19

1837年、世界初の幼稚園として「一般ドイツ幼稚園」が開設された。

※20

(Paul Gerhard Natorp • 1854~1924)  
ドイツの哲学者、教育学者。新カント派に属する。

(8) デューイの教育理論

アメリカにおける進歩主義教育運動（新教育運動）の中心的人物がデューイ※21である。

彼は教育を「経験を絶え間なく再組織し改造することである」と定義した。そして従来の教科書などを中心に教師によって展開する教育の在り方を批判し、人は「**為すことによって学ぶ**」ものであるから（**経験主義**）、学習は児童の自発的活動を中心に営まれるべきである（**児童中心主義**）と主張した。

デューイは独自の学校観に基づいて附属実験学校※22を併設して、児童中心主義などの教育実践を開始し、1899年、『**学校と社会**』に報告書としてまとめた。

この中で児童中心主義を次のように表現している。

|         |                                                                                                                     |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 『学校と社会』 | いまやわれわれの教育に到来しつつある変革は、重力の中心の移動である。それはコペルニクスによって天体の中心が地球から太陽に移されたときと同様の変革であり革命である。このたびは子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々の営みが回転する。 |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

またデューイは1910年、『**思考の方法**』において、**問題解決学習**の理論を以下のように展開した。

- ①子どもの直接経験の中から問題を発見し、主体的に解決できる能力を身につけさせる

②批判的反省的思考能力を身につけることをねらいとする

③問題は現実の社会現象として存在するものが選ばれる

具体的な方法としては以下の5ステップを通して進め、あらかじめ教師が用意した授業計画に従う学習方法は想定していない。

- ①そのテーマに関わる疑問点の抽出

②その疑問点の整理

③疑問点解決のための仮説の設定

④推理によるその仮説の吟味

⑤調査・実験等による検証

※21



（John Dewey ・ 1859 ～ 1952）  
プラグマティズムの代表的哲学者

※22

シカゴ大学内。通称、**デューイ・スクール**

もし検証の結果、問題点の解決に至っていないことがわかれば、また新たな仮説を立てて同様の作業を繰り返し、問題解決に至るまで続ける。

デューイは、最終的に正しい解決に到達したかどうかは、そこに至る過程に比べれば重要ではないと捉えた。

## 2. 現代の教授・学習理論

|         |        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 発見学習    | ブルナー※1 | <p>教師が知識体系を学習者に示すのではなく、学習者自らが知識を発見していくことを重視した学習方法。</p> <p>1959年、スプートニク・ショックを契機として、特に理数系科目のカリキュラム改革を意図して開催されたウッズ・ホール会議※2の議長を務めた際、その記録を『<b>教育の過程</b>』として執筆し、発見学習を提唱した。</p>                                                                                                                                                                        |
| プログラム学習 | スキナー※3 | <p>スキナー自らが開発したティーチングマシンという機器を使った学習方法。</p> <p>プログラム学習は個別学習であり、学習目標に到達するプロセスをどの子どもでも通過できるように組み立てられたもので、次の原理により構成される。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>①スモール・ステップの原理※4</p> <p>②即時確認の原理※5</p> <p>③積極的反応の原理※6</p> <p>④自己ペースの原理※7</p> <p>⑤学習者検証の原理※8</p> </div> <p>プログラム学習は現在、コンピュータ支援教育の一環として多用されている。</p> |

※1



(Jerome Seymour Bruner・1915～2016)

※2

1959年9月、アメリカ、ケーブ・コッドのウッズ・ホールに全米科学アカデミーの呼びかけで34人の科学者、学者、教育者が集まって行われた会議。

※3



(Burrhus Frederic Skinner・1904～1990)

※4

学習内容を小さく分け、小部分を1つずつ学習して最終目標に到達する。

※5

学習者が解答した直後に正誤を知らせ、確認させる（フィードバック）。

※6

学習者が積極的に取り組めるようにする。

※7

個人の学習速度に合わせて進行する。

※8

結果によって学習内容の良し悪しを判断する。

|             |           |                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-------------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 完全習得学習※9    | ブルーム※10   | <p>ほぼ全員の学習者に教育内容を完全に習得させるための学習理論。目標を明確にし、適切な評価・指導を行うことを目指す。</p> <p>ブルームは教育評価を次の3つに分類している。</p> <div><p>①診断的評価</p><p>②<b>形成的評価</b>※11</p><p>③総括的評価</p></div> <p>完全習得学習によれば、目標を明確にし、それに基づいて合理的な評価を実施し、適切な指導を行えば、時間的な差異はあるものの、学習者は同一程度までの学習達成が可能となるとした。</p> |
| 適性処遇交互作用※12 | クロンバック※13 | <p>学習者の特性や適性との相互作用によって指導法・処遇の効果は決定されるという理論に基づき、すべての児童・生徒に合う指導法によろうとはせずに、個々の適性に応じてその指導法を変えようとする考え方。</p>                                                                                                                                                  |
| 有意义受容学習     | オズベル※14   | <p>学習者がすでに持っている知識と新しい内容を関連付け、理解に繋げていく学習方法。</p> <p>機械的な暗記を強いるのではなく、学習する内容に意味を持たせて、子ども達に考えさせたり推理させたりすることができる。</p> <p>そのためには知識と新しい内容を関連付ける予備教材・補助教材の提示※15が重要であるとした。</p>                                                                                    |

※9  
masterly learning＝マスタリーラーニング

※10



(Benjamin Bloom・1913～1999)

※11  
学習過程の途中で学習者の理解度などを確認するために行う評価

※12  
ATI＝Aptitude Treatment Interaction

※13  
(Lee J. Cronbach・1916～)

※14  
(David Ausubel・1918～2008)

※15  
先行オーガナイザー

## 3. 教授・学習理論の革新的な試み

|                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|--------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>ドルトン・プラン</p> <p>提唱者<br/>パーカー・スト※1</p>   | <p>多人数のクラスでも子ども達の個々の能力を伸ばすことを目的として考案された、個別学習の方式※2。</p> <p>従来の時間割と画一的な一斉授業を廃止し、自由と協同を基本原理として個別的学习指導を行うとともに、学校全体をひとつの共同社会とみなして「剛気なる人間」の育成を目指した。※3</p> <div data-bbox="391 463 884 1052" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>①小学校4年生以上と中等学校生徒が対象。教科を主要教科※4と副次教科※5の二群に分ける。</p> <p>②主要教科は午前中に実施。従来の教室での授業を廃止して、教科別に参考書・教具等を備えた実験室※6を設ける。</p> <p>各実験室にはその教科の専門の教師が在室し、子ども達への個別指導を行う。</p> <p>③午前の学習が終了すると、学級に戻り、進度の確認、自己評価、学習上の相談や討議を行う。</p> <p>⑤午後は学級で一斉に副次教科を学習する。</p> </div> |
| <p>ウィネトカ・プラン</p> <p>提唱者<br/>ウォッシュバーン※7</p> | <p>ドルトン・プランとほぼ同じ頃、アメリカ・イリノイ州ウィネトカ町の小・中学校で実践された個別学習の方式。教科領域の設定、個別学習、学級の解体などの点においてドルトン・プランと類似点が多い。</p> <div data-bbox="391 1265 884 1709" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>①教科を共通基礎教科と創造的集団活動の二群に分ける。</p> <p>②基礎教科は、学級を解体して教師作成による個人別の教材・自己診断テストなどを使用し、個人のペースで学習を進める。</p> <p>③創造的集団活動は、共同研究や創作活動が重視され、原則として学級単位で行う。子ども達の関心に沿った取り組みが許容され、厳密な到達目標などは設定しない。</p> </div>                                                                                                     |

※1



(Helen Parkhurst・1887～1973)

※2

1920年、アメリカ・マサチューセッツ州ドルトン市のハイスクールで最初に試された。

※3

日本では、大正11(1922)年に成城小学校で導入された。

※4

国語・数学・理科・地理・歴史・外国語

※5

音楽・図画・工作・家庭・体育

※6

laboratory

※7

(Carlton Wolsey Washburne・1889～1968)

|                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>プロジェクト・メソッド</p> <p>提唱者<br/>キルパトリック ※8</p> | <p>デューイが提唱した問題解決学習理論をさらに発展させる形での学習指導法を研究し、デューイと共同でプロジェクト・メソッドとして提起した。</p> <div><p>①子ども自らが目的を設定、選択する。</p><p>②学習遂行のための具体的な方法を計画。</p><p>③その計画を実際に遂行する。</p><p>④活動中の進歩と最後の結果を評価する。</p></div> <p>教師は、①のテーマや問題の設定が適切になされているかを判断する。適切と判断した場合、実施のための計画や活動に必要な条件の整備、学習者の相談に応じる。</p> <p>※9</p>                                                                                                                                                              |
| <p>モリソン・プラン</p> <p>提唱者<br/>モリソン ※10</p>      | <p>1926年にアメリカで提起された学習指導法。ドルトン・プランと同様に生徒の自主的な活動を行わせつつも、基礎的な要素は確実に考えることが必要であるとした。</p> <p>教科を特性によって5つに分類し、それぞれについて固有の教授段階を設定する。そのうち、科学型については学習単元を組織して以下の5つの段階で展開する。</p> <div><p>①探求</p><p>子ども達がどれだけ予備知識を持っているかを事前にテストや問答によってチェックし、学習の動機付けをする段階。</p><p>②提示</p><p>教師が学習内容を子どもに教授する段階。</p><p>③同化 ※11</p><p>学級全体で目標に向かって学習を進め、子ども達が教師から学んだ単元を自ら学習し、理解を図る段階。</p><p>④組織化</p><p>学習単元を子どもが自ら整理する段階。</p><p>⑤発表 ※12</p><p>学んだ内容を他の子ども達や教師の前で発表する段階。</p></div> |

※8



(William Heard Kilpatrick・1871～1965)  
アメリカの教育学者

※9

日本では大正時代後期に導入され、大正新教育運動に大きな影響を与えた。

※10

(Henry Clinton Morrison・1871～1945)

※11

(類化)

※12

(反覆)



モリソン・プランは、テスト・評価・指導を繰り返して、学習の完全習得を図り、学力の向上をねらうものであった。

第3節 学習指導の形態と方法

1. 学習指導の形態

(1) 教師と児童・生徒等との関係による分類

|           |                                                                                                                                                             |                                                                                                |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 講義法       | 一般的な教育方法。大勢の児童・生徒等を一室に集め、教師が講義する形態※1。                                                                                                                       |                                                                                                |
|           | 説明法                                                                                                                                                         | 児童・生徒の知性に訴えて、客観的な理解を促す                                                                         |
|           | 講話法                                                                                                                                                         | 臨場感豊かに話すことで、想像力に訴えて理解を促す                                                                       |
| 討議法       | 討議法には、課題討議法、問題解決討議法、発展的討議法などがあり、目的に沿った方法を選ぶ必要がある。                                                                                                           |                                                                                                |
|           | パネル・ディスカッション                                                                                                                                                | 公開討論会の一種。4～6名を選び、これらの代表者が大勢の聴衆を代弁するような形で論議しあう。                                                 |
|           | フォーラム                                                                                                                                                       | 公開討論会の一種。提案者の意見発表からはじまり、討論後多数決で賛否を決める。学級会や全校集会などに適している。                                        |
|           | ディベート                                                                                                                                                       | ある特定のテーマに対して賛成・反対に別れて論戦をする形式。討論の参加者は、自己の主張とは別にどちらかの立場に立つ。論理の展開、質問の仕方、反論の仕方などを競い合い、最後に審判が判定を下す。 |
| 問答法<br>※2 | 問答法は、子ども達の興味・関心に基づいた積極的な学習活動を促進しようとする意図のもとに行われる。<br><br>教師は子ども達の応答に対して正誤をスピーディーに行うとともに、応答が完全ではなくとも、その方向が正しければ是認した上で訂正や補正を加え、子ども達自身の言葉で答えられるように誘導することが重要となる。 |                                                                                                |

※1  
教師の言語的活動が中心であり、基本的な知識・技能を教育するときに有効な教授法。

※2  
講義法の対になるもの。教師からの質問はその目的が明確で、簡単・明瞭であり、子ども達の既得の知識と経験を刺激し、新たな興味・関心を喚起できるよう配慮する必要がある。

## (2) 児童・生徒同士の関係による分類

|        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一斉学習   | 小学校や中学校において一般的な授業形態。年齢や能力など共通点の多い子ども達を一室に集め、原則として一人の教師によって一斉に学習させる方法。※3                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| グループ学習 | <p>子ども達をいくつかの小集団に分け、それぞれに目標を持たせて学習活動を展開させる形態。</p> <p>①習熟度別編制</p> <p>《メリット》</p> <p>能力が平均化しているので指導が容易となり、指導率や学習効果が上がりやすい</p> <p>《デメリット》</p> <p>能力の低いグループは子ども達が劣等感を持つことによって学習に意欲的に取り組まない危険性がある</p> <p>②習熟度別ではない編制</p> <p>《メリット》</p> <p>能力の低い子ども達が学習意欲を高め、相互に助け合いながら学習を展開できる</p> <p>《デメリット》</p> <p>能力の高い子ども達が優越感を持ち、逆に低い子ども達が劣等感や依存心を抱くこともある</p> |
| 個別学習   | <p>個別学習は、個々の能力、適性、興味・関心に応じて学習できることが特徴で、以下の2形態がある。</p> <p>①学習活動のすべてを個別化</p> <p>②一斉授業の中で目的に応じて個別化</p>                                                                                                                                                                                                                                          |

※3

この学習形態は、いろいろな能力や適性をもっている子ども達が、統一した目的をもって学習を進めていく際に有効となる。しかし、子ども達の興味・関心への配慮が欠け、教師の押しつけ型の授業となりやすい。また平均、もしくはそれより下位レベルを基準とした授業を行うことが多く、能力が上位の子ども達には物足りない、下位の子ども達には理解しにくいという印象を与えがちとなる。

2. 現代の学習方法論

|                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ティーム・ティーチング<br><br>提唱者<br>ケッペル※1 | <p>これまでの授業は、原則として1学級1教師という編制で行われていたが、この方式では2人以上の教師がティームをつくり、それぞれが役割分担し、協力し合いながら指導計画を立て、授業を展開していく。</p> <p>《メリット》</p> <p>①多くの視点から子ども達の実態を把握できる。</p> <p>②教師の専門性や特性を生かし創造的な授業を実施できる。</p> <p>③多様な学習グループを編制でき、子ども達の実態に応じた指導が可能となる。</p> <p>《デメリット》</p> <p>①教師が依存的になり、子ども達への働きかけが滞る。</p> <p>②指導目標に沿わない授業になる可能性がある。</p> |
| モジュール学習                          | <p>授業時間を10分・15分などに区切ったその最小単位をモジュールと呼んでおり、そのモジュールを組み合わせで学習を進行させていく。</p> <p>モジュールごとに違う内容を学習する、あるいは反覆するなどにより、子ども達が飽きることなく、効果的に学習できるという利点がある。※2</p>                                                                                                                                                                |
| ジグソー学習<br><br>提唱者<br>アロンソン※3     | <p>ジグソー学習とは協同学習法の一種で、誰もが発表者となることで、全員の表現力・思考力を高める有効な学習方法である。</p> <div><p>①学級の中で4人程度からなるグループ※4を作り、Aグループ、Bグループ、Cグループ……、とする。</p><p>②用意された学習課題の分担を決め、その担当者がホームグループを離れて、課題1のグループ、課題2のグループ、課題3のグループというように担当ごとにグループを構成する※5。</p></div>                                                                                  |

※1  
(Francis Keppel・1916～1990)

※2  
小（中）学校学習指導要領（平成29年告示版）総則には「各教科等の特質に応じ、10分から15分程度の短い時間を活用して特定の教科等の指導を行う場合において、当該教科等を担当する教師が、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した中で、その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは、その時間を当該教科等の年間授業時数に含めることができること」とある。

※3  
(Elliot Aronson・1932～)

※4  
ホームグループ

※5  
エキスパートグループ

|                                        |                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                        | <p>③それぞれで課題を検討、結果を出したのち、構成員はもとのホームグループに戻り、エキスパートグループでの結果を報告しあう。</p> <p>④ホームグループでは、各自の報告を総合してグループとしての結論をまとめる。</p> <p>たとえば、課題1のグループ以外の者は課題1の検討の過程を知らないことから、他のメンバーが細かく質問をすることで情報交換が必然となり、学習者間のやり取りが活発に行われることになる。</p> <p>またホームグループでは、その課題に取り組んだ者は自分一人しかいないため、適切な説明が求められ、責任感を持った取り組みをするようになる。</p> |
| <b>バズ学習※6</b><br><br>提唱者<br><br>フィリップス | <p>集団討議の一形式であり、一斉指導による授業の中で、子ども達が数人のグループ※7をつくり、与えられた課題について話し合いながら結論を導いていく。</p> <p>学級全体での多人数による討議法の場合、特定の発言者に片寄りが出たり、受け身の子どもが出てきたりするが、この方式であれば全員が積極的に参加でき、子ども達の人間関係も深まり、学習効果が上がる。</p> <p>バズ学習が終わったあとは、一斉授業に戻り、グループでの話し合いの結果を報告したり、それをもとに全体で討論したりする。</p>                                       |

※6

buzz。バズとは、蜂がブンブンうなることを意味し、この学習形態になると、教室がガヤガヤ騒がしくなることから名付けられた。

※7

6人グループで6分間話し合いをするのが最も効果的であるということから6・6討議とも呼ばれる。

## 重要キーワード 暗記 &amp; checkシート

## 第1章 教育論

## ■教育の必要性

|     |                        |
|-----|------------------------|
| カント | ・人間は教育されなければならない唯一の被造物 |
| 野生児 | ・アヴェロンの野生児 ・アマラとカマラ    |

## ■意図的教育と無意図的教育

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 意図的教育  | ・意図的、計画的な働きかけ                  |
| 無意図的教育 | ・自然的な環境や社会的環境 ・意図しない人間形成教育 ・感化 |

## ■訓育と教授

|    |                                                  |
|----|--------------------------------------------------|
| 訓育 | ・教科外教育 ・徳育<br>→ 訓話などを通して子どもたちの感情や意思などを教育（道徳的な教育） |
| 教授 | ・教材 ・教科教育 ・知育<br>→ 知識や技能を、教材などを媒介として伝える教育        |

## ■実質陶冶と形式陶冶

|      |                                   |
|------|-----------------------------------|
| 実質陶冶 | ・知識 ・技能 → 教材の実質的な部分、内容を身につけさせる教育  |
| 形式陶冶 | ・思考力 ・想像力 ・記憶力 → 精神的な能力を形成するための教育 |

## ■学習の転移

|       |                              |
|-------|------------------------------|
| 学習の転移 | 一つの知識、技能が他の知識、技能の習得を効率的にすること |
|-------|------------------------------|

## ■教授・学習の理論

|        |                                     |
|--------|-------------------------------------|
| ソクラテス  | ・問答法（産婆術）                           |
| コメニウス  | ・学校改革 ・直観教授 ・『大教授学』 ・『世界図会（絵）』      |
| ルソー    | ・自然教育（消極教育） ・子どもの発見 ・『エミール』         |
| ペスタロッチ | ・3H's法 ・開発教授 ・『隠者の夕暮』『玉座の上に〜』 ・労作教育 |
| ヘルバルト  | ・四段階教授（明示/連合/系統/方法） ・『一般教育学』        |
| ライン    | ・五段階教授（予備/提示/比較/総括/応用）              |
| フレーベル  | ・幼児教育 ・幼稚園 ・恩物（遊具） ・『人間の教育』         |
| ナトルプ   | ・『社会的教育学』 ・「人間は、人間社会によってのみ人間になる」    |
| デューイ   | ・経験主義 ・児童中心主義 ・問題解決学習 ・子どもが何をするか    |

## ■現代の教授・学習理論

|          |        |                                                           |
|----------|--------|-----------------------------------------------------------|
| 発見学習     | ブルーナー  | ・系統、問題解決 ・教育の過程<br>→ 学習者自らが知識を発見していくことを重視                 |
| プログラム学習  | スキナー   | ・スモールステップ ・フィードバック<br>・eラーニング<br>→ ティーチングマシンと結びつけた個別学習の方法 |
| 完全習得学習   | ブルーム   | ・マスタリーラーニング ・形成的評価<br>→ ほぼ全員の学習者が教育内容を完全に習得するための学習理論      |
| 適性処遇交互作用 | クロンバック | ・ATI<br>→ 個々の適性に応じて指導方法（処遇）を変える                           |
| 有意義受容学習  | オーズベル  | ・先行オーガナイザー ・予備教材<br>→ 学習者がすでに持っている知識と新しい内容を関連付けて理解させる     |

## ■教授・学習理論の革新的な試み

|             |          |                        |
|-------------|----------|------------------------|
| ドルトン・プラン    | パーカースト   | ・主要教科と副次教科 ・実験室 ・成城小学校 |
| ウィネットカ・プラン  | ウォッシュバーン | ・共通基礎教科と創造的集団活動        |
| プロジェクト・メソッド | キルパトリック  | ・生徒による目的－実行－評価         |
| モリソン・プラン    | モリソン     | ・学習単位 ・探求－提示－同化－組織化－発表 |

## ■現代の学習方法論

|             |        |                      |
|-------------|--------|----------------------|
| ティーム・ティーチング | ケッペル   | ・複数教師によるティーム編成       |
| モジュール学習     |        | ・小スキット（10～15分）       |
| ジグソー学習      | アロンソン  | ・ホームグループ ・エキスパートグループ |
| バズ学習        | フィリップス | ・6人6分討議              |